

私の写真人生

2023, 1, 25 渡邊 晴雄

- 1, はじめに
- 2, 最初の仕事（シチズン時計、技術部、シャッター設計室）
- 3, 写真クラブで撮影技術のレベルアップ
- 4, 使用した写真機材
- 5, 尊敬する5人の写真家
 - 1)、入江 泰吉
 - 2)、土門 拳
 - 3)、田沼 武能
 - 4)、白簾 史郎
 - 5)、捧 武（アマチュア写真家）
- 6, 私の自薦、20作品
 - ①、辻音楽師（インド）
 - ②、花輪を売る少女（インド）
 - ③、羽田・李鵬会談（中国）
 - ④、村人の競演（中国）
 - ⑤、素朴な微笑（中国）
 - ⑥、祈り（チベット）
 - ⑦、ウイグル市場にて（中国、ウルムチ）
 - ⑧、雪の蒲原平野（日本、新潟）
 - ⑨、夕餉の支度（アイルランド）
 - ⑩、ベートーベンの散歩道（ドイツ、ボン）
 - ⑪、魔の山、ミニアコンカ（中国、四川省）
 - ⑫、雲海（日本、志賀高原）
 - ⑬、薬師寺の枇杷（日本、奈良）
 - ⑭、タージマハール（インド、アグラ）
 - ⑮、働き者の象（インド、ジャイプール）
 - ⑯、家族の固い絆（中国、張谷英村）
 - ⑰、爺と孫娘（中国、シャングリラ）
 - ⑱、諾日朗滝（中国、九寨溝）
 - ⑲、スズダリの朝（ロシア、スズダリ）
 - ⑳、渋谷を撮る William, Klein（日本、渋谷）
- 7, あとがき



1、はじめに

写真に親しんで来たことで、人生がより豊かになり、本当に良かったと思っている。
私に興味を感じて、写真撮影を始めた動機とプロセスを先ず、振り返ってみる。

1)、カメラとの出会い

中学生になった時、時次郎叔父さん(母の弟)から カメラ『Kodak ベス単』を貰った。
フィルムを買って撮影できる環境ではなかったが、メカニズムに興味を感じた。

2)、写真展『Family of Man(人間家族)』の鑑賞

大学に入学し新潟へ通学していた頃、大和デパートで開催されていた写真展を観る機会があった。

それは、思想、言語、種族を超えて、“人間の全てが一つの家族である” という人間に対する愛と尊厳を基調としていた。

有名、無名の写真家による200万枚以上の写真から エドワード・スタイケンが 選択した500枚が展示されていた。

初めて見たその写真展に私は圧倒されて、“写真を撮りたい” という強い欲望を感じた。
経済的な余裕が無かった頃だったけど、躊躇せず写真集を買って今でも持っている。

3)、初めてのカメラの購入

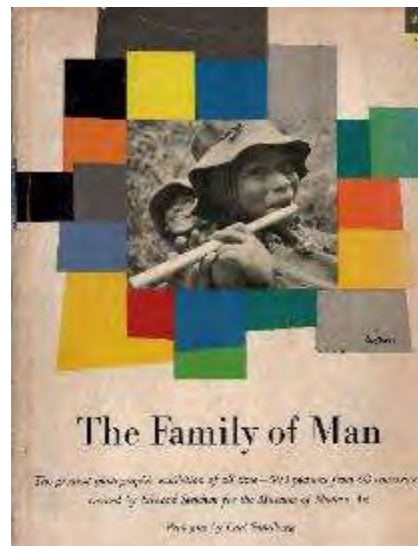
家庭教師のアルバイトで金を貯め、1年後に35mmカメラを買った。
両親の写真も撮影出来て、嬉しかった。



Kodak ベス単



Olympus 35S



写真展『人間家族』 1956年
NY 近代美術館が世界68国で集めた503枚
(編集は Carl Sandburg)

2、シチズン時計でカメラ関係の仕事に従事

新潟大学工学部を卒業後、1958年4月にシチズン時計へ就職した。

配属先は技術部シャッター設計室。

当時、カメラ業界はドイツがリードしていたが、日本勢が追い上げていた。

シチズンは数年前から、多角経営の一つとしてカメラ用レンズシャッター事業を始めていた。

主なユーザーは、ミノルタ、富士写真光機、日本光学、タロンカメラ等。

競争相手は精工舎とコパルで、シチズンは最後発。

レンズシャッターでは、ドイツの Compur と Pronter の2社がリードしており、日本のメーカーはドイツ製品を手本にしていた。

シチズンは、業界で最高速の 1/2000 秒のシャッターを開発、製品化していた。

又市場では一眼レフカメラが商品化されて来ており、それに使用されるライトメーターもシチズンはミノルタ、旭光学、コシナへ供給していた。

シャッター設計室では、多種多様なカメラに接することが出来た。

Hassel Brad, Contarex, Vitessa, Retina, Minox, 等
又、多くのカメラ雑誌、や新聞から世界の情報を見る事が出来た。

時代は急速に変化した。

日本のカメラメーカーはドイツメーカーに勝ち、メカニカルシャッターは電子シャッターの時代に。



世の中が激しく動いていた状況の中で、私は設計の仕事に限らず、設計管理、生産技術、品質管理、等、色々の業種を経験する事が出来た。

その後、私は精機部門に移動することになり、プリンタ事業の立ち上げに参加することになった。

然し、カメラ、写真に対する興味は持続けていた。

3, 写真クラブで、撮影技術のレベルアップ

写真撮影技術を向上させるには、何らかの写真クラブで多くの人と交流し、切磋琢磨することは大切である。私はいくつかの写真クラブで活動をした。

撮影会、撮影旅行、展示会等、を通じ多くの友人が得られて、楽しかった。

1)、シチズン写真クラブ

① 1960年頃（シチズン時計写真クラブ）

シャッター設計室在籍の頃、田無工場で適当な時期に写真撮影会や発表会を行っていた。そこで先輩の田中清太郎さん等から撮影の基本を教わった。然し長くは続かなかった。その頃の定期例会に私が出品した写真が下記のごとく保管されていた。

佐渡へ旅行した時のスナップである。

中々良く撮れていたと思う。



お盆近し



吹矢競争

② 2010年以降

シチズンを退社後、暫くして OB 会に入会し、定期的にシチズンの食堂で作品を展示することが出来た。

その頃バス旅行では、美人林、白馬、白川郷等へ宿泊込で出かける事も出来た。

現在は、東所沢の徳樹庵で、PCのディスプレイを使って例会を行っている。



2)、柳瀬写真クラブ

所沢市柳瀬地区を中心にして、長い歴史を持つ写真クラブである。

講師は置いていない。

最近では、写真クラブの本来の活動以外に、文化事業への貢献という事で、ポートレートの撮影を、希望に応じて行っていた。

◎ 月例会、

私は、2008年から2022年迄所属していたが、友人も多く出来て、楽しかった。

月例会では作品を持ち寄り、デスカッション。

作品は、柳瀬公民館での展示と、毎年、市役所のギャラリーで展示会を開催している。

以前は、会報の発行、撮影旅行、も実施していた。

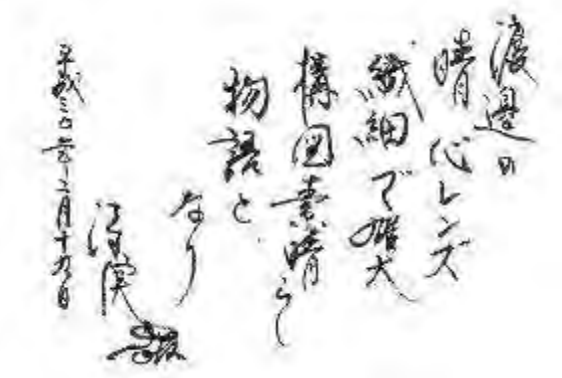


◎ 柳瀬写真クラブ展

毎年、市役所のギャラリーで写真展を開催。
多くの人が見に来て下さって、貴重なご意見を
聴かせて頂いた。

いくつかの例を紹介すると ——

- * “柳瀬写真クラブの写真展は年々、
レベルが高く成ってきていますね。”
- * 右の案内ハガキの写真に対しては
“フエルメールの絵のような採光ですね。”
- * 私の展示していた写真を見て、
“Carl Zeiss の レンズで撮ったようですね。
私も同じレンズなので、分かります。”
- * 下図のようなメモを書いて下さった方も
居られた。(2018年)



第6回柳瀬写真クラブ展



「夕陽の支度」 渡瀬晴雄

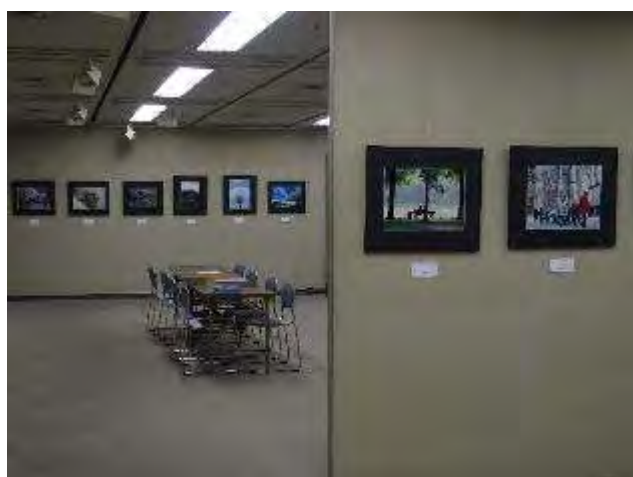
<作品の一つ一つにドラマがあります>

期 間 2014年1月6日(月)～12日(日)
AM9:00～PM5:00
(初日 PM0:00 より/最終日 PM4:00 まで)

会 場 所沢市役所 1F 市民ギャラリー
西武新宿線航空公園駅より徒歩5分
西武池袋線は所沢駅で西武新宿線に乗り換

<柳瀬写真クラブ>
ホームページ <http://www.yanase-rc.com/portalweb/>
連絡先メールアドレス y.yanase@hotmail.com

写真展は、古い友人達との再会の場になっていた。



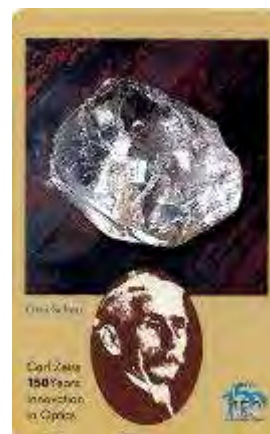
柳瀬写真クラブを昨年3月に卒業した。

長い間、お付き合い頂いた写真クラブ会員の皆様に、感謝している。

4, 使用していた写真機材

(1)、カメラ

- ① Olympus 35 ・ 大学 2 年の時に買った最初のカメラ
- ② Minox 35 ・ 海外旅行用に買った小型軽量機
- ③ Contax TVS 1 ・ 長女が結婚する時、綺麗な画質のカメラを探して買った。
Carl Zeiss レンズに魅了され、Contax 党になった。
- ④ Contax TVS 3 ・ TVS 1 がドイツで盗難にあったので、買代えた
- ⑤ Contax RX ・ TVS 1 を買ったすぐ後に、主力機として買った。
Zeiss レンズは、28mm、50mm、135mm、80～200mm
- ⑥ Yashica ・ Zeiss レンズが使える低価格機（危険な場所で使用）
- ⑦ Contax Aria ・ 小型軽量モデルで、とても気に入った。 常用レンズは45mm
- ⑧ Olympus STYLUS1 ・ 初めて買ったデジタル機。 交換レンズ不要のモデルで常用。



(2)、交換レンズ

Carl Zeiss レンズの描写力に魅了されてしまった。

Aria 使用の時は、45mm (テッサー-T) と 80～200mm (バリオ・ゾナー) を主に使っていた。

Zeiss Lens には OttoSchott が開発した極めて高品質のガラスが、使われていた。

(3)、フィルム

Kodak, Konica 400 ネガフィルム (三脚は、殆ど使用せず)

(4)、現像、プリント処理

ヤオコーの裏に柳瀬フォトがオープンした時、店長の斎藤さんと知り合った。

現像、焼付処理を依頼したが、自慢するだけあって、素晴らしい仕上がりがだった。

5、尊敬する 5人の写真家

特に影響を受けた5人の写真家につき、好きな作品を含めてコメントしたい。

1)、入江 泰吉 (1905～1992)

半世紀近く、大和路の風景と仏像の写真を撮り続けた。入江さんは、類まれな審美眼とそれに裏打ちされた「滅びの美」を尊ぶ精神を持っていた。大阪で写真活動を繰り広げていたが、戦争の爆撃ですべてを失って、故郷奈良に引き揚げた。そこで、運命を変えた三つの出来事に遭遇した。



①、古本屋で亀井勝一郎の『大和古寺風物詩』を見て、大和路の世界にのめり込んだ。
その写真版の写真を担当することになった。

②、三月堂で、偶然疎開先から戻ってきた白布に包まれた四天王像を見て、多分進駐軍に接収されてしまうのだろうと推定した。そしてその前に大和路の文化遺産を記録して残そうと思った。（実際には接収されなかったが。）

③、友人の東大寺観音院住職、上司海雲に再会した。

上司住職の紹介で、志賀直哉、会津八一、亀井勝一郎、広津和郎、小林秀雄 等の文化人と『天平の会』を通じて、交友関係が生まれた。

最初の本格的な写真集は、1958年に東京創元社 から出版された【大和路】である。これには次のようなエピソードがあった。小林秀雄、白洲正子、上司海雲（東大寺住職）、小林茂（東京創元社社長）、元興寺住職が集まった時、小林秀雄が小林社長に入江さんの写真集出版を熱心に勧めた。

小林社長はその場で即決し、【大和路】の出版が決まり、入江さんは感激したそうである。白洲正子は【大和路】の校正を手伝った。

小林茂さんは、私の義母の兄である。 私は義母に紹介されて、【大和路】を購入した。

1962年には、【大和路】(2 集)が出版され購入した。

入江さんの写真集は、私の大和路写真撮影の手本だった。

1957年頃（撮影 入江泰吉）

右から

小林秀雄、白洲正子、

上司開雲、

小林茂、(創元社社長)

元興寺住職、



◎ 私の好きな入江作品



・ 東大寺、二月堂参道

大仏殿の裏から二月堂に向かう参道は、古都奈良らしい情感が漂っている。清楚な木蓮の花が、この場の雰囲気には溶け込んでいる。

私も撮影を試みた場所であるが、傑作は撮れなかった。



・ 興福寺、阿修羅像

天平像では、外来の仏教文化を消化して独自の美意識が表現されている。

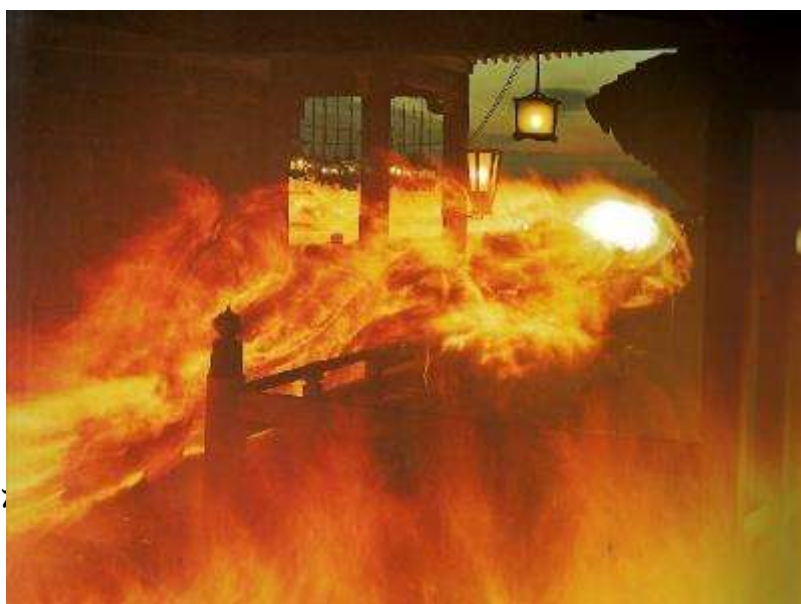
入江さんは、阿修羅像と秋篠寺の伎芸天に特に惹かれていた。

“神秘的な空間とその表情が作品に緊張感を齎している“
と言われている。



• 斑鳩の里 落陽(法隆寺塔)

法隆寺五重塔の上空、
大空一杯に広がる夕焼け雲。
塔のある風景を入江さんは
『大和路の象徴』として好んだ。
然し、このような情景は千載
一遇のシャッター・チャンス
だった。



• 東大寺、お水取り お松明

声高らかに唱和される声明、
舞い落ちる松明の炎、焦げた
木切れの匂い。
入江さんが子供の頃から魅了
されてきた修二会である。

私は、3回お水取りを見に行った
けれど、このような凄い情景は
見られなかった。

2)、土門 拳 (1909～1990)

土門拳の写真を初めて意識したのは
社会主義、リアリズムを主張していた
頃、『筑豊のこどもたち』を見た時だった
ように思う。

『鬼の土門』と称されるほどの鬼気迫る
完璧な成果を求める仕事ぶりは人を
引き付ける魅力があった。

土門さんの著作で買った写真集等は
かなり持っている。

・ ヒロシマ、・ 古寺巡礼、・ 日本の風景、・ 死ぬことと生きること ・ 写真作法 等。
エッセイ集は、大変参考になった。



土門さんは、1968年59才の時に脳出血で倒れた。

60才以降は、車椅子で 古寺巡礼(第5集) の撮影を開始した。

1978年3月、1ヶ月近く奈良の病院で待機して、初めて雪の室生寺を撮影した。

1979年、70才の時、脳血栓で倒れ、以後意識は戻らなかった。

2003年4月、郷里の燕市に行った帰りに、鶴岡の藤沢周平記念館と合わせて酒田市にある
土門拳記念館を訪ねた。そこで、土門拳の全貌を知ることが出来た。

◎ 私の好きな土門作品



・平等院 鳳凰堂 タヤけ

撮影を終え振り返り支度をして振り返ると
『茜雲を背に黄昏れている鳳凰堂は目
くるめく速さで走っている』のに気が付いた。
カメラを組み立てている間にも『鳳凰は
逃げるようにどんどん走っている。』
そしてたった1枚撮れたのが、この写真で
教科書にも採用された名エッセイ
『走る仏像』を生んだ舞台だった。

・雪の室生寺

土門さんの写真撮影は、室生寺に始まり室生寺で終わったと言う人もいる。

土門さんは雪の室生寺を撮りたくて、門前の橋本屋に泊まりこみ、雪の降る時を待っていたが中々雪は降らなかった。

荒木良仙師は“さ一つと一刷毛刷ったような春の雪”が最も良いと言っていたそうだ。

3月12日の早朝、女将の初代さんが、『先生、雪が、雪が降りました。早く起きて下さい』と土門さんの手を引っ張って起こした。

そして撮影出来た写真である。



・室生寺 弥勒堂

釈迦如来坐像左半面相

明るく秀で、凛々しい風貌は「何か水際だったすどさを感じさせる。

土門さんは、『実に利口な面相』という印象を受けていた。



・梅原龍三郎を怒らせた話 1941年8月

土門さんの執拗な撮影を物語るエピソードとして、知られている。

写真嫌いで知られる画家を一枚でも多く撮影したい野心を、土門さんは持っていた。

先ずは、タバコを指に挟んだにこやかな全身像、

2, 3枚目は机によりかかる半身像、——

6枚目には画架に向かい木炭で絵を描くポーズを注文した。

ピントを合わせていると、梅原画伯の口がわなわな震えていた。シャッターを切り、土門さんが礼を言ってお辞儀すると、梅原は立ち上がり、座っていた籐椅子を両手で持ち上げ、「ウン」と気合もろともアトリエの床に叩きつけた。

怒りに燃える顔を「実に男性的な美しい顔」
と思った土門は、

「お顔だけのクローズアップをもう一枚」と頼んだ。

梅原はあきれた表情で、なだめるように言った。“もう、いいじゃないか！”



土門さんは、後で『概念的な演出主義に毒されていた』と反省の弁を述べていた。

・ボタ拾い

“筑豊のこどもたち” から

1959年、日本の炭田地帯には、何の施策も行われないうちに20万人の飢餓人口がボタ山の裾野に放棄されたままだった。
失意のどん底の失業者とその子供たちを
.....

炭住街では、危険な子どものボタ拾いは日常の習慣になっていた。
小学校1年生ぐらいまでの子まで手探りで拾い集めている。

代表的なリアリズムの一枚



3)、 田沼武能 (1929～2022)

東京工芸大学を卒業し、サンニュースフォトス に入社し
木村伊兵衛に師事した。

木村伊兵衛と土門拳はライバル関係で犬猿の仲だったが、
田沼さんは2人の巨匠に可愛がられた。

やがて、タイムライフ社の契約写真家として国際的に活躍。

彼は1960年代からライフワークとして、世界 120 ケ国を
超える国々で“子どもの写真”を撮り続けてきた

2019 年には写真家として初めとなる文化勲章を受章した。



田沼さんの撮影対象は、広がった。

子供を通して人間ドラマを優先していたようであるが、発行された写真集を見ると実に広い。

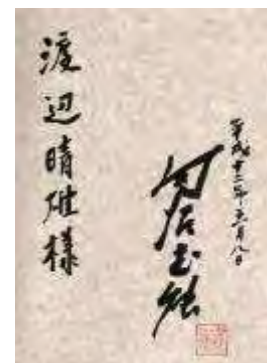
“武蔵野”、“文士”、“アンデス賛歌”、“カタルニア・ロマネスク”、“トルコ紀行”等。

◎ 『人間万歳』 写真展

田沼さんを始めて認識したのは
2000 年 4 月、渋谷の東急本店で
開催された『人間万歳』写真展を
見た時だった。

素晴らしさに驚嘆し、その場で
写真集を購入した。

田沼さんにサインをして貰った。



- ・ 穀物のゴミをとる母子
(ネパール)



獲れたての魚を売り歩く（トンガ）



ぼくに弟が生まれた（日本）

◎ 田沼武能 追悼写真展（2022、11）

2022年6月1日(写真の日)に田沼さんは亡くなられた。93才だった。
追悼写真展 が東京工芸大学で開催された。
その時、私が1929年から大切に参考にして
していた写真集『人間家族』に田沼さんの
写真が入っていたことを、そこで展示されて
いた資料から初めて知った。



4)、 白簾 史朗 (1933～2019)

大月市出身の山岳写真家。

『心の山』をテーマに山と言葉を交わし、
山岳写真の地平を切り開いた。

18才の時、岡田紅陽に弟子入りし、同行した
南アルプスで、胸壁が朝日に染まった北岳
(3,193m)の威容に圧倒され山にのめり込んだ。

1962年に山岳写真家として独立後、富士山、
南アルプス、尾瀬の撮影に力を入れた。

ヨーロッパアルプス、ネパール、アンデス、カナダ
等世界の山の撮影を行った。

写真集は100冊を超えている。



高畑山 からの
落日富士



雁が腹摺山(1,874m)よりの
富士山眺望

2000年頃、どこかの写真クラブに入会したいと思っていた。

朝日新聞で、大月市が白旗史朗山岳写真撮影会を募集していることを知った。

前日、白幡さんのセミナーを聴講し、翌日早朝に登山して、富士山を撮影するプログラム。

2回は現地で雨天のためセミナーだけだった。

3回目(2003年)は快晴とは言えなかったが、晴れていた。

大蔵高丸(1,781m)への登りは、きつかったが撮影出来て、爽快な気分を味わった。



大蔵高丸で、私が
撮影した富士山



今回、白幡さんの著作を購入し、サインをして頂いた。このアドバイスは役立った。本格的な山岳写真クラブの『白い峰』への参加勧誘を受けたが、体力的に無理と判断して、諦めた。

5)、捧 武 (1933~2010)

- 新潟県燕市で、布団店を経営していたアマチュア写真家。
私の従兄(父の妹の三男)で3才年上。
父が亡くなった時、父の遺影を大きくプリントして貰った。
- 20才の頃から家業の傍ら一貫して、郷土の風俗や農村風景等を
ライフ・ワークとして撮り続け、5冊の写真集を纏めた。
著名な写真家 秋山庄太郎 を師として仰いでいた。
秋山さんは、『田園の微笑』で序文を書き、『かやぶきと生きる』
では監修 を行った。



私とは住んでいた所が遠く離れており、会う機会は少なかったが、武さんが1993年、第2回林忠彦賞を受賞した後に、一日じっくりと写真について話をする事が出来た。その時、“林忠彦賞を受けた後、生活が一変した”と言っていた。

* お互いの作品について、デスカッションした。



◎ 激しい降雪の中の電車(武さん撮影)

・武さんのコメント

“余り評判が良くない“ がどうか？

・私のコメント

燕に居た頃、我家のすぐ側を新潟交通の電車が走っていた。

この写真は、激しく降る雪の夜の情景を見事に表現している。



◎ コブラの踊り(私がインドで撮った写真)

・武さんのコメント

チャンスがあればインドへ行ってみたい。
その時は、“コブラの眼“を撮影したい。

◎ 武さんの写真集

私は 武さんの写真集 5冊 をもっている。

“凄い事をやったな” と写真集を見るたびに思う。



① 田園の微笑

第2回林忠彦賞を受賞した作品

写真集は残っておらず、私は
ポストカード集 を貰った。

こどもの頃の田園が鮮やかに
思い出される。

稲のはざ木、田圃の水路。

こんな農業用水の小川で、鮒やナマズ
を捕まえて遊んだことが思い出される。



②ふるさとの群像

燕駅 (JR 弥彦線、新潟交通電車線) 広場

三条への高校通学、新潟、長岡への大学通学、
就職で燕を去る時、いつもこの駅から出発した。



③ 電鉄浪漫

1999年4月4日に廃線になった新潟交通電車線に
惜別の思いを込めて、四季折々の沿線風景、や
行事、人々の表情等を浮かび上がらせている。



④ かやぶきと生きる

10年も燕から遠く離れた荻ノ島
(かやぶきの里)へバイクで通い
村人との人間関係を作って撮影
したそうである。

ネガフィルム200本、7,000枚の
写真を編集して出来た写真集。
並の人では出来ない作品である。





⑤ 秋山庄太郎と新潟

秋山さんは、何度も新潟を訪ねた。

いつも、武さんが寄り添っていたそうである。

撮影地は アルプの里、 新津市、新潟市、佐渡 等。



◎ 没後10周年記念写真展

武さんは、2010年12月に亡くなられた。

10年過ぎた2020年に、燕市で記念写真展
が 開催された。

多くの人が、その成果を認識した結果である。

今、思うことは

一緒にインドへは行けなかったけど、

“ もう一度、写真談義をしたかった“。

もっと長生きして欲しかった。



6. 自選 20 作品

◎ 自選作品の選定 ——

好きな自分の作品20点を選ぶ事にしたが、選定基準を定める事は難しく、苦勞した。
仕事に関するジャンルは選定対象とせず、無理をして下記の作品を選んだ。
結果として、日本で撮影した作品は、非常に少なかった。

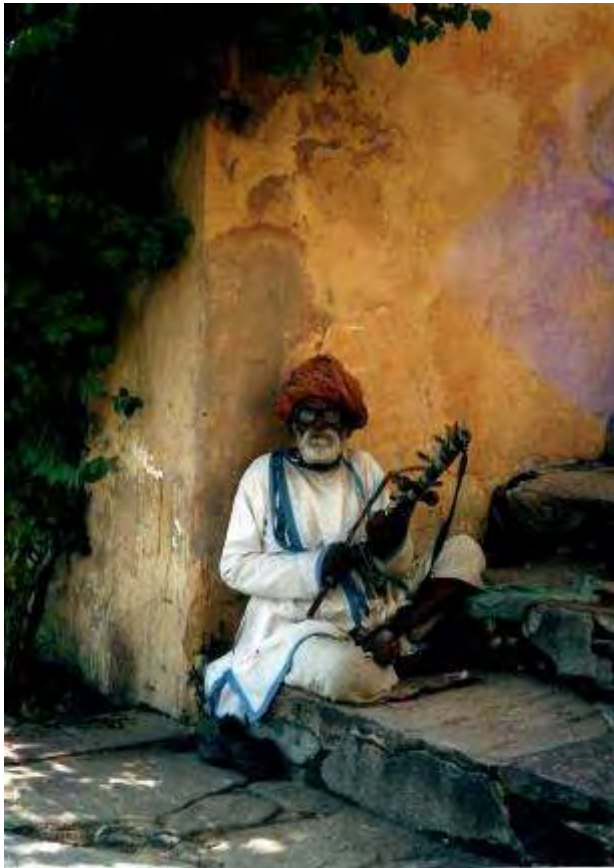
	タイトル	撮影地	注
①	辻音楽師	インド ジャイプール	表情を変えぬ老楽師に魅せられた
②	花輪を売る少女	インド バンガロール	細い小路で可愛らしい少女が2人
③	羽田・李鵬 会談	中国 北京	撮影許可をお願いし許可を得た。
④	村人の競演	中国 石鼓村	村の入口で静かな曲を聴いた。
⑤	素朴な微笑	中国 共青城	山奥の僻村で出会った微笑
⑥	祈り	チベット ラサ	微動だにせず、祈り続けていた。
⑦	ウイグル市場にて	中国 ウルムチ	ウイグル人の実像を見られた。
⑧	雪の蒲原平野	日本 新潟	昔の田園が保存されている。
⑨	夕餉の支度	アイルランド	フェルメールのイメージ
⑩	ベートーベンの散歩道	ドイツ ボン	交響曲“田園”が聴こえた。
⑪	魔の山 ミニアコンカ	中国 四川省	最近初登頂された魔の山
⑫	雲海	日本 志賀高原	素晴らしい雲海が広がっていた。
⑬	薬師寺の枇杷	日本 奈良	唐招提寺に続いている道
⑭	タージ マハル	インド アグラ	世界一の美しい墓
⑮	働き者の象	インド ジャイプール	象は力仕事が得意
⑯	家族の固い絆	中国 張谷英村	家族愛が感じられる
⑰	爺と孫娘	中国 シャングリラ	仲の良い爺と孫娘
⑱	諾日朗滝	中国 九寨溝	九寨溝最大の滝
⑲	スズダリの朝	ロシア スズダリ	ニコラ教会で人の来る事を待つ
⑳	渋谷を撮る W.Klein	日本 渋谷	千載一遇のシャッターチャンス

◎ 私の写真の特徴 —— 三脚嫌い

私は、写真を撮影する時、ただ一つ気にしていた事は“シャッター・チャンス”。
三脚を使う撮影は嫌いで、専ら“スナップ写真”の撮り方に徹していた。
ロバート・キャパの“崩れ落ちる兵士“を恵比寿の写真美術館で見る機会があったが、
戦場での撮影だから、カメラブレ、ピントブレ、が当然発生していた。
そんな作品を感激して見ていたせいか、丁寧な撮影態度では無かった。

◎ 撮影地 —— 海外、特に中国、インド に魅力を感じていた。

現役の時代、日本は Japan as NO.1 と持てはやされて、高度成長を謳歌していた。
勤務していた会社でも、事業の多角化による新事業の拡大を志向していた。
海外市場を向き、新規販売網の設立と拡張が主な仕事だったので、海外へ出張する
機会は非常に多かった。 訪問した国は36ヶ国以上、出国回数は、130回を超え
ていた。 非常に仕事は忙しかったが、海外で写真を撮影するチャンスも多かった。



① 辻音楽師

インド、ジャイプールのアンペール城の入口で、年老いた辻音楽師が居た。カメラを向けても表情を変えず、威厳を保っていた。

② 花輪を売る少女

バンガロールのメインストリートを一歩外れた路地には、一般市民の生活が広がっていた。少女2人が店を開き、花輪を作りながら売っていた。とても可愛かった。



③ 羽田・李鵬 会談（北京、人民公会堂）

胡錦涛政権の頃、日中間には大きな問題がなく、中国の洪水被害と日本に飛来する黄砂対策として中国での植林を共同で実施していた。

私も日中青年研修協会の理事で植林事業に関係していた。2002年に研修協会会長だった 羽田さんのカバン持(秘書長)で、岳陽での植林に参加したが、その時北京で行われた羽田・李鵬会談に同席した。

すぐ側の席だったので、直接李鵬さんに撮影の許可をお願いし、OK を頂いて撮影出来た貴重な写真である。 帰る時、李鵬夫人から握手を求められた。



④ 村人の競演(雲南省石鼓村)

村の入口の小屋で、老人二人が胡弓と笛の合奏を楽しんでいた。

優しく、和やかな音色だった。



⑤ 素朴な微笑(中国、共青城)

山奥の僻村で出会った老婆は、優しい笑顔で我々を迎えてくれた。



⑥ 祈り (チベット、ラサ)

シュエトン祭りの最中だったが、
セラ寺に通じる道端で、身動きもせずに祈り続けている修行僧が居た。



ボタラ宮 屋上

⑦ ウイグル市場にて（中国、ウルムチ）

シルクロードの旅で最初に訪れた所はウルムチ。

市場では、市民の生活が凝縮されている。ダイナミックな市民の姿を見る事が出来た。



⑧ 雪の蒲原平野（日本、新潟）

農地改革で昔のはぎ木は消えてしまったが、観光用に“夏木のはぎ木“は保存されている。この日、弥彦山には霧に隠されていた。

ここは、私の子供の頃の家から数キロしか離れていないところである。

子供の頃は、こんな田圃や小川で魚採りなどで遊んでいた。懐かしい。

良寛はこんな畦道で、子供たちと 毬つき で遊んだのだろう。



⑨ タ餉の支度（アイルランド）

妻と2人で2000年にアイルランドへの旅をした。

ダブリンからは、交通機関も宿泊もホテルもバラエティーに富んだ旅だった。

Kerry であるレストランに入った時、その厨房で調理をしている婦人が目に入った美しいシーンだったので、数枚シャッターを切った。

フエルメールの絵を思わせる 採光や雰囲気、気に入っている一枚である。」



⑩ ベートーベンの散歩道（ドイツ、ボン）

ドイツ、ジュッセルドルフの見本市の時、宿泊はベートーベンが住んで居たボンだった。

ボン大学の近くに、綺麗な公園があり綺麗な女性がベンチに座っていた。

確証はないが、多分ベートーベンが散歩していた所だろうと思った。



⑪ 魔の山、ミニヤコンカ（中国、四川省）

中国、四川省のチベット族居住地に、高度5,000mのミニヤコンカがある。

2004年に中国植林活動で、康定へ行った時の事である。

ミニヤコンカは未踏峰で、遭難が続き 魔の山 と言われていた。

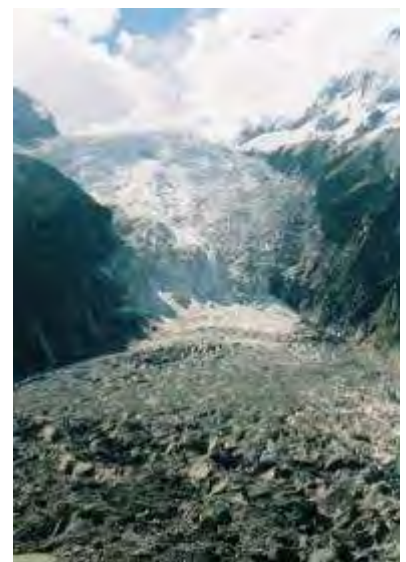
一方、観光資源とする為に道路、リフト、展望台等の建設が進んでいた。

チベット族首長の好意で、当時未公開だった展望台で素晴らしい山容を見る事が出来た。

私は、展望台からミニヤコンカと海螺溝氷河を眺望出来た最初の日本人となった。



植樹祭には、1,000人以上の学生、農民、軍人等が集まった。



海螺溝氷河

⑫ 雲海（日本、志賀高原）

志賀高原で天気に恵まれて、早朝撮影出来た写真である。
雲はとても綺麗だった。



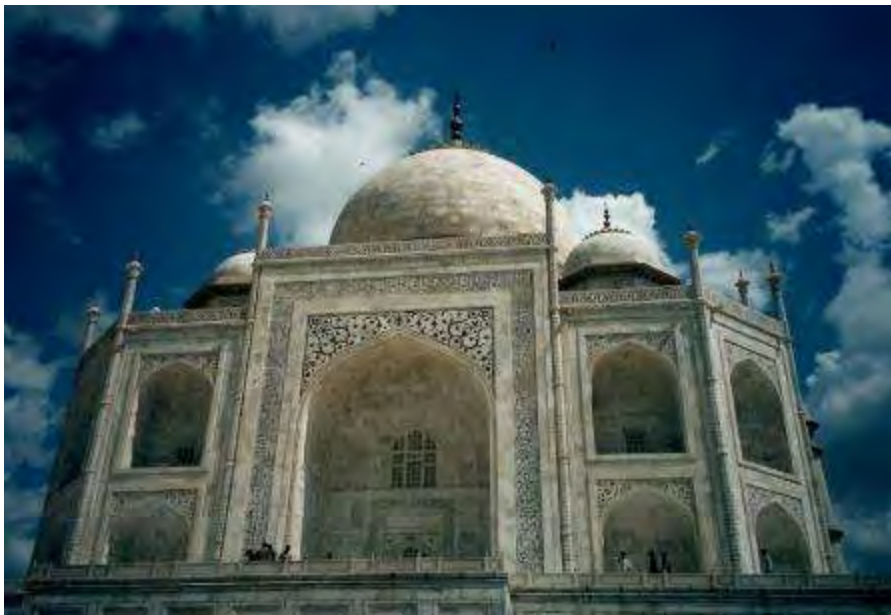
⑬ 薬師寺の枇杷（日本、西の京）

薬師寺から唐招提寺へ向かう道に面して、枇杷が見事に実っていた。
土塀の色とのコントラストが素晴らしかった。



⑭ タージ・マハール

ムガル帝国5代目の皇帝シャー・ジャーハンが、愛妃ムムターズ・マハルのために22年もかけて建造させた廟である。世界中から貴重な貴石が集められ、高い装飾技術を持つヨーロッパ人が招かれ、20,000人を超す労働者が集められて、働いたそうである。大理石に刻まれ、貴石をはめ込んだタージ・パターンは素晴らしく、他に類を見ない美しさに圧倒された。タージ・マハールの補修のための工房があり、貴石の部品を磨いていた。それらを嵌め込んだ大理石のプレートを売っていた。(下図参照)
高価だったけど、記念に買ってきて満足している。



⑮ 働き者の象（インド、ジャイプール）

砂糖黍収穫の季節だった。

インドでは象が力仕事を受け持って働いていた。



⑩ 家族の固い絆（中国、湖南省 張谷英村）

おばあちゃんが孫をあやし、嫁さんが母親の髪を刈っている。
仄々とした情景で、家族愛が感じられる。



⑪ 爺と孫娘（中国、四川省 シャングリラ）

大草原(伯東海)に突然 爺が孫娘をヤクに乗せて現れた。
“10元(約200円)で、ヤクに乗せてあげる“ というオッフアー。
娘が可愛くて人気があり、多くの仲間がヤクに乗った。
爺は大金を稼ぎ、意気揚々として、帰って行った。



⑱ 諾日朗滝 （中国、四川省 九寨溝）

九寨溝の滝の王者。 幅が 329m 高さは 30m。

鏡池から樹間を抜け轟音を発して流れ落ちる姿は、壮観。



⑲ スズダリの朝 （ロシア、スズダリ）

ゴールデン・リングのスズダリにある木造のニコラ教会は、美しい被写体だった。

アクセントを求め、教会の前で人が現れる時を待っていた。



②0 渋谷を撮る巨匠 William Klein

William Klein は従来の常識の逆をいく写真を撮る巨匠で『ブレ、ボケ、アレ』は気にせず、ダイナミックな写真を撮る。

2018、2月26日、午後2.00頃、渋谷駅前の広場を通りかかった時、猛烈なスピードでこちらに駆けてくる車椅子の上から、群衆を撮り続けている老人に遭遇した。

車椅子が止まった時、付き添っていた人に訊いた。“この方は写真家ですか？”と。彼は答えた。“Mr. William Klein だよ。君知らないの？”

次に William Klein が話しかけてきた。

“君もカメラを持っているね！今回は2日間、渋谷と新宿を撮るつもりだよ”。私が、撮影しても良いか？と尋ねたら、大きくうなずいてくれたので、数枚撮った。帰宅して調べたら、驚いたことに有名な写真家、実業家だった。その時90才。

彼は30年間、日本に来ていなかったが私は、“千載一遇の貴重なシャッターチャンスに恵まれた”という事だった。

その時、カメラを持っていた事を神に感謝した。

(右は、W.Klein の日本での作品)

2022,9,4 96 才で死去



渋谷、駅前の広場にて撮影

7, あとがき

◎ “コロナ禍の中、如何にして時間を有効に使うか？”

このテーマが非常に重要になって来たと認識している。

今後の人生は、これにどう取り組むかで、決まると思っている。

◎ 二人の作家から頂いた貴重なアドバイス

- ・ 曾野 綾子さんの講演を聴講したことも有り、良いアドバイスを頂いた。

『子孫に対して、金と物は残すな。しかし記録を残せ。』

- ・ 五木寛之さんからは、下山期の高齢者に対して、多くのアドバイスを頂いた。
最も参考にしたのは、『回想のすすめ —— 中公新書』だった。

◎ 旅行記 と 写真集 の 記述拡大（今後の行動として）

- ・ 子孫に対して、なるべく沢山自分の記録を残してやりたいと思っている。
私は、“もっと多くの事を、父母から学んでおくべきだった”と後悔している。
- ・ この“私の写真人生”では、20点しか自選写真作品を掲示しなかった。
纏め方がまずかったようだ。
ジャンル別に纏める事も自由に考えたい。例えば “花の作品” “山の作品”
“仕事に関する作品” 等々。
- ・ 旅行記でも、未だ多くのテーマがある。

◎ コミュニケーションの復活

コロナ禍で、友人等とのコミュニケーションは、著しく損なわれてしまった。

“リスクについては、各個人が万全の注意を払う” という事が “With Corona”
時代での原則であるが、メール等の有効利用により、交友関係が前進する事を
願っている。

以上、